

## ● 沖縄

## 上地隆裕

惑星全体が大中小の銃火器の発射音、戦闘機、そしてミサイル等の飛来時にばら撒く爆音のため、日を追うごとにキナ臭くなってきた。筆者の住む沖縄では特に、自衛隊による「南西シフトと称する模擬戦闘訓練が本格登場」し、ゆったりした気分ではクラシカル鑑賞を楽しむことが出来ない。

ようやく「Widow Maker」(寡婦製造機)と呼ばれる欠陥機「オスプレイ」が「飛行停止処分」となり、少しは胸を撫でおろしたのもつかの間、今度は在沖米軍GI達による民間地域での乱暴狼藉事件が急増したりPFOSと呼ばれる汚染水が基地内から民間の飲料水源に漏れ出し、新たな恐怖エリアを作り出して、命が幾つあっても足りない場所、それが2023年度の沖縄県であった。

小学校や幼稚園の校庭に戦闘機の数キロもある窓部分、部品等が落下したり、リハーサル中あるいは本番中の楽団、合唱団、オペラ、各種器楽、声楽公演会、各種コンクールが、上空を飛来するジェット機(会場の約九割が基地周辺に位置しているため)の爆音で、頻繁に中断を余儀なくされ、集中力を保持するのも並大抵ではないのが現状だ。

にもかかわらず、当県の演奏芸術界は挫けるどころか、更なる高みを目指して躍動し、次々と注目すべき成果を出し続けてきた。

その牽引役を果たしているのは、琉球交響楽団(RSO)=音楽監督(MD):大友直人=である。同団はプロ団体であると宣言(2001年3月)して以来、組織力を付けるための創意工夫を実践している。が、「金食い虫」オーケストラの維持運営は並大抵ではなく、世の中の他の同様な団体同様、その命運を握るのは不特定多数の音楽ファンと、文化の擁護に理解を持つフィランソロピスト(篤志家)の存在だ。

参考までにRSOの活動内容を具体的に述べると、(1)定期公演=これまでに46回実施=新年度初頭=3月9~10日47、48回目の公演実施予定、(2)0歳児からのコンサート、(3)学校公演、(4)特別コンサート、(5)受託コンサート、の五種のシリーズを提供し、まさにフル回転の様相を呈している。

RSOの存在は文句なしに、「本県楽壇の顔」であり、同じく演奏水準のパロメーターだ。RSOが活動停止に追い込まれることがあれば、それは自動的に「本県楽壇が二つの最重要な機能を失なうことを意味する」と言ってよい。

さてアンサンブル面での突出したレヴェルはRSOに代表されるが、それ以外のジャンルで国内最高水準に達した本県出身の演奏家の数は、今も依然として極少だ。例を挙げるとなると、どうしてもヴェテラン勢の名を挙げざるを得ない。

具体的な実績を積んでいる存在は、砂川涼子(ソプラノ)、上地さくら(チェロ)、上地美実(ヴァイオリン)が群を抜く。宮古島出身の砂川は、役付き歌手として中央では欠かせない地位を築いているし、続く上地姉妹は、昨年度だけでも映画「そばかす」や、連続TVドラマ「リバーサル・オーケストラ」、「8時23分のペンディング・トレイン、明日君と」「G線上のあなたと私」その他の作品で、演奏担当、音楽監督および出演を務

める一方、在京のメジャー楽団にも参加する等、中央楽壇では多忙を極める存在だ。

極論を承知で述べると、中央でオファーがあるということは、それだけ演奏水準が高いことを意味するので、本県に本拠を置く演奏家達は、「本県内でいたずらに誇大広告宣伝を続けず、中央で自らのレヴェルを問う勇気を示す時期に来ている(既に要職を得た先輩・例えば、上里友二(読響)、宇根康一郎(九響・首席)、元東京Universal Phil首席ホルンで、現在は本県で琉球フィルを組織、代表者として活躍中の上原正弘等)事実を認識すべきだと思う。

紙数の関係でいきなり総論になるが、昨シーズンの本県楽壇における最高の収穫は、RSOの第46回定期(9月10日)である。実力者横山幸雄を迎え、大友のバトンで展開した「ALLラフマニノフ・プログラム」(バガニーニの主題による狂詩曲、交響曲第2番)だ。

全作本県初演、しかも作曲家が16型(16-14-12-10-8)の弦楽器編成を想定して書いた作品を、変則10型(10-8-6-6-4)のRSOは頑張って演奏を貫徹。指揮者大友の気迫と勇氣、それに必死で食らい付いた楽員のヤル気には脱帽した。

こういうバワフルなアンサンブル作りを、県民は「県の宝」として認識し、「民謡主導の風潮に風穴を開けて欲しい」と強く願うものである。

その実現への第一歩として、RSOを県出身の移民の多い国々へ「演奏旅行」へ送り出してはかががらう。